追手門学院大学文学部紀要　33号　1997年12月30日

# 元禄期の江戸、京都、奈良、伏見、大津の具体相

## ――西鶴の町人物三部作の再構成による――

奥田　尚

Some Aspects of the Cities [Edo, Kyoto, Nara, Fushimi, Otsu] in the Second Half of the Seventeenth Century

Hisashi OKUDA

### はじめに

井原西鶴は一六四二年（寛永一九）に大坂に生まれ、一六九三年（元禄六年）八月十日享年五十二歳で大坂に没した。富裕な大坂町人と見られており、十五歳で俳諧を心ざし、二十一歳ころに俳諧の点者となり、その軽妙な句作から「阿蘭陀流」と呼ばれ、注目はされたものの、俳諧師としては「異端」と見られていた。

西鶴の生涯に大きな画期となったのは、一六七五年（延宝三）四月三日の妻の死去で、この年西鶴は三十四歳、妻は二十五歳で、三人の子があった。妻の死去の二年後の延宝五年五月二十五日、大坂生玉本覚寺で「矢数俳諧」（一定時間内にできるだけ多くの句を詠み、その数を誇る）の興業を行った。一日一夜に千六百句を詠み、「西鶴・俳諧大句数」として刊行した。この記録が延宝七年に仙台の俳諧師による三千句に破られると、同八年五月七日から八日に西鶴は四千句を詠んで更新し、さらに一六八四年（貞享元）には摂津住吉神社で二万三千五百句を詠み、大記録を達成した（ちなみに一分間に十六句という計算になるという）。

一六八二年（天和二）十月、西鶴四十二歳、処女作の『好色一代男』を完成させた。その後しばらく「好色物」と呼ばれる作品群を書き、やがて『武道伝来記』（一六八七年刊）など「武家物」に転じ、『日本永代蔵』・『西鶴織留』・『世間胸算用』を代表とする「町人物」を書いた。

本稿では、この町人物の三部作を再構成することにより、西鶴の時代つまり一七〇〇年ころの、いわゆる「元禄文化」の時期の諸都市、具体的には江戸、京都、奈良、伏見、大津の様相について考えることにしたい。大坂・堺・長崎などを除外したのは、原稿の分量による理由からである。大坂については別に発表することになっており、本稿はその姉妹編にあたる。

次に本稿で利用する西鶴の町人物三部作について、簡単に説明しておこう。

『日本永代蔵』は、一六八七年（貞享四）年ころの執筆、翌年正月の刊行とするのが一般的である。副題は「大福新長者教」で、全六巻、各巻に五話を載せ、全三十話からなる。巻頭に目次に相当する「目録」を記し、各話の中心となる人物の象徴の「紋所」のような模様を染め付けた大きな暖簾の掛かった戸口の絵を載せる。ただし各話の主人公は一人とは限らず、別の主人公の類話や他の例話が付載されている場合も多い。『永代蔵』の第六巻の巻末には、「此跡より　人は一代　名は末代　甚忍記　全部八冊　仁之部・義之部・礼之部・智之部・信之部　板行仕候」との出版予告が記されている。この『甚忍記』は準備されたものの、完成・板行にはいたらず、その草稿を含む遺稿は死後に『西鶴織留』として刊行された。

『西鶴織留』は、一六九四年（元禄七）三月に板行された。全六巻で、第一巻は四話、第二巻は五話、第三巻は四話、第四巻・第五巻は各三話、第六巻は四話となっており、都合二十三話である。各話は必ずしも主要人物が一人とは限らない。第一巻・第二巻は「西鶴織留　本朝町人鑑（本朝町人かがみ）」と題され、第三巻から第六巻は「西鶴織留　世農人心（世の人ごころ）」という題になっている。西鶴は『本朝町人鑑』と『世の人心』と『永代蔵』とを合わせて「三部の書」としようとしたと、『織留』の編者の北村団水（団粋）はその序文に記している。『甚忍記』として書いているうちに、それよりも『町人鑑』と『人心』に分けた方がよいと、西鶴は考えはじめたのであろうか。したがって『織留』は、『永代蔵』以降に時に触れて書きためたものであり、次の『世間胸算用』の完成後に書かれた部分もあろうし、さらに推敲を加える予定のものもあろう。なお、『甚忍記』が完成されなかったのは、一六八八年（元禄元）ころから西鶴を襲った激しい目の痛みによるとされている。

『世間胸算用』は、一六九二年（元禄五）正月に刊行された。翌年八月に西鶴は没するから、最晩年の作ということになる。全五巻、各巻それぞれ四話からなり、合計二十話が収められている。各話の主要人物が一人とは限らないことは、前二作と同じであるが、副題に「大晦日（おほつごもり）は一日千金」とあるように、

大晦日の年の越し方という共通の場面の設定になっている。

以上が簡単な三部作の紹介であるが、『永代蔵』は町人たちの経済文化を描きながら、副題の「大福新長者教」にも明らかなように、やや教訓めいた「オチ」（落語などの「オチ」）を付そうとする意図がある。『織留』にも同様の意趣のあるものもあるが、霊異譚めいた部分が付されるものもあり、西鶴の一分野である「雑話物」的な色彩もうかがえる。それに比し『胸算用』は、ほとんど「オチ」を無視しており、それだけにそこに描かれた人物の哀歓や悲哀は痛切で、人間性そのものが全面に押し出されている感が強い。おそらく元禄元年ころの眼病を契機に、西鶴自身に人生へのある種の諦念が生まれ、逆に諸々の人間の生きざまへの愛着が生まれたのであろう。

本稿で西鶴を引用するにあたっては、原文そのままを引用するのではなく、一読して理解できるように、古語まじりの現代訳とした。不必要な部分は文章の途中であっても省略したり、読みやすいように段落を勝手に分けたが、それは一々断わっていないし、やや意訳めいた部分も加えた場合もある。西鶴の文章は関西人にとっては、さほど難解なものではないが、やたらと長い文章がつづき、形容語がしばしば重ねられるためでもある。正確な引用文は、西鶴の原文に改めてあたってみていただきたい。

引用部分の末尾の『永』は『日本永代蔵』、『胸』は『世間胸算用』、『織』は『西鶴織留』を示し、漢数字はその巻数、算用数字はその中の何話にあたるかを示している。なお、引用の中の（　）は読み方、〔　〕は意味あるいは補足である。

## 一　天下の御城下、江戸

西鶴は、諸国の神が出雲に集まり、国々の恵方をつかさどる年徳の神を決め、正月を迎える準備にかかるという俗信を利用して、日本の都市を次のようにいう。

「諸国の神々、毎年十月出雲の大社に集まり給い、氏の安全の御相談あそばし、国々への年徳の神を極め、春のことどもを取り急ぎ給うに、〔京・江戸・大坂の〕三つの津への年神は、中にも徳の備わるを選び出し、奈良・堺へも老功の神たち、また長崎・大津・伏見にもそれぞれに神役を分けて、さて一国一城の所、あるいは船着き場・山間の都市、繁盛の里々を見立てて、そのほか都遙かの嶋住まい・片流れの屋根の一軒家にも、餅つきて門松立てる門には、春の来たらぬということなし」（『胸』三―4）。

京都・大坂・江戸の三都が最大都市、奈良・堺・長崎・大津・伏見の五都市を中都市、主要城下町などを小都市とみている。

江戸は「天下の御城下」（『永』三―1）で、その繁栄のあらましは、次のように述べられている。

「天下泰平、国土万人は江戸商いを心がけ、その道その道の店出して、諸国よりの荷物、船路・陸路の馬、毎日数万駄、問屋に着く。これを見れば世界には、金銀は沢山あるものなのに、これを儲ける才覚ができぬことは、諸商人に生まれたからには、口惜

しい。

さるほどに十二月十五日より通り町〔日本橋筋・中橋筋・京町筋〕の繁昌、世に宝の市とはここのこと。常々の日用品の店はさて置き、正月の景色では、京羽子板・玉ぶりぶり細工〔正月の玩具〕に金銀ちりばめ、破魔弓一つを小判二両などで買う人があるのは、大名の子息に限らず、町人までも気が大きい。

町筋の中央に店まで出して、商いに暇なく、銭は水のごとく流れ、白銀は雪のように降りしきる。富士の山影豊かに、日本橋の人の足音は、百千万の車のとどろき。船町の魚市の毎朝の売り帳を見れば、四方は海とはいえ、よくも鱗の種が続くものだと話題になる。

神田須田町の八百屋の毎日の大根は、里馬数万駄で運び、まるで畠が歩いてくるよう。半切りに並べた唐辛子は、秋深き竜田の山を武蔵野に見るようで、瀬戸物町・麹町で売る雁や鴨は、さながら地上に黒雲が延びたかのよう。

本町の呉服物は、五色の京染め・武家屋敷向けの散らし模様で、四季を一度に眺め、その華麗なこと。伝馬町の摘み綿は、吉野の曙の山かと見え、夕べには提灯連なり、道は明らかに、大晦日の夜に入りても一夜千金の家々の大商い。ことに足袋・雪駄は、諸職人が万事の買い物納めに、明け方になって調えに来る。

ある年、雪駄が一足、足袋が片足もないことあり。日本第一の人の集まり所なればなり。宵の程は一足が七分、八分の雪駄、夜半過ぎには一匁二三分となり、夜明け方には二匁五分になれども、買う人ばかりにて売る物なし。

ある年、掛け小鯛二枚が十八匁ずつせしこともあり。橙（だいだい）一つが金子二歩ずつせしに、高くて買わないということなし。京・大坂にては相場違いの物は、たとえ祝儀物にしてから、中々調えるべき人の心にはあらず。ここをもって江戸は、大名気とはいえり。京・大坂に住み慣れて心の小さい者も、〔江戸の〕気にあてられ、銭を一々勘定することなし。小判を厘秤（りんだめ）〔厘を量る小さい秤〕にかけることもなし。軽きを取ればそのまま先に渡し、世の廻り持ちの宝なれば、一人として吟味することもなし。

十七八日までの上方への銀飛脚の宿を見るに、大分（だいぶ）の金銀色も変わらず上りては下り、一年に道中を幾たびするか、金銀ほど辛らく苦労なものはなし。これほど世に多き金銀なれども、小判一両持たずに江戸にも年をとる者あり。

されば歳暮の御使者とて、太刀目録、御小袖、樽肴、箱入り蠟燭、何を見ても万代の春めいて、町並みの門松、これぞ千歳山の山口、常磐橋の朝日影、豊かに豊かに万民の身に照り添い、曇らぬ春に会うようだ」（『胸』五―4）。

これは『世間胸算用』の結びの章なので、「江戸誉め」のようになっているが、「小判一両持たずに、江戸にも年を取る者あり」と貧者の点景が、添えられているところが心憎い。

江戸は「天下の御城下」であったが、「江戸は天下の町人北村・奈良屋・樽屋をはじめ」（『織』一―1）豪商が多かったこと

はいうまでもない。よく知られた例では、江戸駿河町の三井九郎右衛門の場合を西鶴も取り上げている。

「三井九郎右衛門という男、駿河町という所に、面九間に四十間、棟高く長屋作りして、新店を出し、万現銀売りに掛け値なしと定め、四十余人、利発な手代を追い回し、一人一色の役目。たとえば金襴類一人、日野・郡内絹類一人、羽二重一人、沙綾（さや）類一人、紅（もみ）類一人、麻袴類一人、毛織類一人、この如く手分けして、天鵞兎（びろーど）は一寸四方、緞子は毛抜袋になる程。緋繻子は鐙印の長さ、龍門の袖覆輪は片方だけでも、自由に売り渡しぬ。ことさら、俄の目見えの熨斗目・急ぎの羽織などは、その使いを待たせ、数十人の手前細工人立ち並び、即座に仕立ててこれを渡しぬ。さによって家栄え、毎日金子百五十両ずつ均しに商売しけるとなり」（『永』一―4）。

三井は加工品をマニュファクチャーにより生産しているのであるが、その原材料は諸国から江戸へ流入する。

大和の小百姓から大百姓になり、やがて綿商人となった男は、大和・摂津・河内から木綿を買い込み、打ち綿にして江戸に送っている（『永』五―3）。京都で染め物の新工夫をして、その染め物を自から江戸へ運ぶ染物屋もおり、彼は江戸からは奥州筋の絹綿を仕入れて、京都へ戻っている（『永』四―1）。江戸向けの酒を難波から（『永』六―5）、伊丹から（『織』一―1）送り、江戸廻し油（『胸』五―2）もある。

物が動けば人も動く。江戸の商人は出羽の酒田の米問屋に現われ（『永』二―5）、長崎で外国品を買う（『永』五―1）。伊勢神宮に参詣して散財し（『永』四―3）、莫大な費用を使って京都の顔見せ芝居を見物する（『胸』三―1）。もちろん逆に京都の呉服屋が江戸に出店もするが、次第にそれは手詰まりになっていく（『永』一―4）。

江戸の経済の繁栄は、そこへ人を引きつける。江戸でひと稼ぎしようと人々が集まることは、京都の分限者の息子が勘当されて、江戸で一旗揚げようとする話がある。その話の中には、品川東海寺の門前にたむろする乞食のなかに、大和の龍田で酒を造っていたのに、江戸で大儲けしようとして失敗した者、泉州堺の諸芸すべてに通じた男であるが、日常の用には役に立たず生活の手段がない者などがでてくる（『永』二―3）。よく似た話には、京都室町の大商人の息子が、親から譲り受けた財産を使いはたし、身につけた芸事だけで江戸に出かけるが、芸事では生活の役には立たずに京都に逃げ戻る話もある（『永』六―2）。どこの人物かはわからぬが、江戸に向かう職人三人が、東海道の関の宿から思い立って伊勢参宮をする話もある（『織』四―3）。これも失敗すれば、乞食になるか、逃げ戻るかとなろう。

江戸に出かけて成功したのは、すでに述べた三井九郎右衛門もそうであり、彼の父は伊勢松阪を本拠とした。伊勢山田から十年年季で雇われた十四歳の小者は、江戸で銭店を営むその雇い主との話の小者であり、江戸で成功する。「後には色々な知恵を出し、船着き場に自由になる行水用の船をこしらえ、刻み昆布を目方で

売り、内面に瀝青を塗り油量の少なくて済む油皿・絞り鹿子の紙のタバコ入れなどを考えた。十五年せぬうちに三万両の分限となり、霊厳島に隠居所を立て、二人の親に孝行した」とある（『永』六―2）。

また同じく江戸に出かけての成功話には、次のようなものがある。ある時、宵に焚いた鍋の下に、次の日まで火が残っているのを不思議に思い、焚き草を気をつけてみると、茄子の木と犬蓼の灰だからとわかった。これは人の知らぬ重宝と、何も持たずに江戸へ下り、銅細工する人を語らって、はじめて懐炉を作りだし、霜月より売り始め、程なく大分限となった。この主人公は、大坂で奈良草履屋を営んでいたが、稼いでもみな人に取られることが嫌になり、一旦は女房の里の住吉の南の遠里小野に移り、そこで手習いの子どもに教え、謡を習ってきてはそれを教えるようなことをし、次第に誰も習わなくなって、銭三十文を儲ける方法さえなくなった男である（『織』一―2）。

江戸に限らずどこでも同じことであるが、「いかな、いかな、広き御城下江戸なれど、日本の賢き人の寄り合い、銭三文、あだには儲けさせず」（『永』二―3）であり、「いかに繁昌の所なればとて、常の働きにては長者になりがたし」（『永』六―2）である。

## 二　呉服の都市、京都

次には京都を見よう。

「京は広う御座る」（『織』四―1）、「都の広さは」（『織』六―1）、「京の広いことを知らぬ」（『胸』四―1）などとあるが、もちろん京都の空間的な広さをいっているのではない。京都にはさまざまな家がありとでもいうような意味で、京都の家々の多種多様なあり方をいい、また「都は目広き所ながら」（『織』一―4）とあるように、京都に暮らす人びとの見聞の広さをも同時に含めてもいる。空間としての京都は、「京に限らず、江戸・大坂の端々、空き地・野原まで少しの空き所もなく、人家立ちつづき」（『永』六―5）と、繁栄をきわめた都市であった。

この京都は、いうまでもなく「御所方へのお出入り」（『織』二―4）、「御所に近う召される」（『織』六―1）などとあり、さらには「私も内裏様の娘に生まれましたれば」（『織』四―1）と庶民の冗談にさえなる、天皇・公家の居所であったことはいうまでもない。もちろん公家もいろいろあり、豪華な蚊帳の注文主を、庶民が「いかなる高家の御物ずき」（『織』一―4）と噂するほどの裕福な公家もいる。もっとも受注した商人は、発注主は町人とあかして、「公家も大名も大方の衆はなるまじ」という。

一方、「その昔」ではあるが、「貧乏公家あって、質物に事欠かれ、柿本人麻呂より以来は我なりと自慢せられし髭を、銀一貫目に質に置かれけるに」（『織』五―4）という貧乏な公家もいた。「たとえば公家の落とし子・大名の血筋といえばとて、昔の剱の売り食い、運は天にまかせ、具足は質屋にありては、時の役には立ちがたし」（『永』五―2）ともある。商人が女郎の名を「これ

は聞きも及ばぬ御公家衆の御名なり」（『永』一―2）と間違えるようなこともある。

西鶴は大商人については名前だけを記し、その内実にはほとんど触れていない。京都の大商人についても、「京のお歴々」（『永』二―1）・「広き都に三十六人の歌仙分限」（『織』二―2）などとする。例外的に京都の大富豪の話を、大商人の隠居の引っ越しという形で描いている。

それによれば「車三輛に銀箱を積」んでいるが、それは三十五年前の明暦元年四月に蔵に入れて以来、はじめて蔵から出したもので、「この銀を出すついでに、向かい屋敷の内蔵を見ると、寛永年中（約五十年前）の書付の銀箱も山のごとし」である。しかもこれは隠居の分であり、財産の本体ではない。また隠居付きの女中は十一人で、本家が衣替えに衣を配る使用人は、男四十八、女五十一、成人前の子ども二十七、合わせて百二十六人である。しかもこの隠居は、総じて商人は吝嗇〔ケチ〕であるのに、「我らが旦那は、万事大名風にして、一代を栄華に暮らし」たとある（『胸』四―1）。

京都の富裕な商人は、「都の長者は、金銀の外に諸道具を持ち伝えたり。亀屋といえる家の茶入れは、一つ銀三貫目で糸屋へもらいうけることあり。二十万両の差引勘定を、年賦で済ます両替屋もあり。とかく都の出来事は、外にては成り立ちがたし。昔の長者が絶えれば、新長者が現われて、繁昌は次第増さりなり」（『永』六―5）である。

もちろん京都の商人も吝嗇で、「京の人、すぐれてしわし〔悋し・吝嗇である〕」（『永』四―3）、「京の室町にては、鯛一枚を二匁四分にて買い取り、五つに分けて杠秤（チギ）〔棹秤〕にかけて取る」（『永』六―2）とあり、「〔鯉や鮒の〕刺身を作りて、盛り売りに五分・三分でも自由に調えければ、京は台所のことせちがしこく、人への振る舞いもこれにて埒を明け」（『永』五―2）るとある。「京・大坂にては、相場違いの物は、たとえ祝儀物にしてから、中々調えるべき人心にはあらず」（『胸』五―4）「京・大坂に住み慣れて心の小さき者」（同）ともある。

吝嗇なのは日常の食生活に限ることではなく、次のような商人の話もある。

「今の都に住みながら、四条の橋を東へ渡らず、大宮通りより丹波口の西へ行かず、諸山の出家を寄せ付けず、諸浪人を近づけず、虫の起きた腹には自家の薬を用い、昼は家職を大事に勤め、夜は内を出ずして、若いときに習いおきし小謡を、それも両隣を憚り地声にして、我ひとりの慰めになしける。灯火受けて本を見ることはあらず。覚えたとおりに、世の費えをせざりき。この男、一生のうち一度も草履の鼻緒切らず、釘の頭に袖を掛けて破らず。万に気を付けて、その身一代に弐千貫目しこため」た（『永』一―2）。

これも一種の食料の話だが、正月用の餅を自分の家ではつかずに、餅屋で調達する商人の話もある。その商人は、餅屋から届いたつきたての餅を、その場で受け取った手代に、「この家に奉公

するほどにもなき者ぞ」と叱る。その理由は、餅はつきたての熱いときには水分を含んでいて、重さが重くなるから、冷えてから水分がなくなった重さで買え、というのである。

この商人の日常の生活も吝嗇で、「不断の身持ち、肌に単襦袢（ひとえじゅばん）、大布子（木綿の綿入れ）に綿三百目入れて、一つより外に着ることなし。袖覆輪（袖の擦り切れ防止に別布で覆う）ということ、この人取りはじめて、当世の風俗として見良げになり、また始末にもなりぬ。一生の内、絹物とては紬の花色（縹色・はなだいろ）のみ。その上、着たこともないもう一つを海松（みる）茶染めにせしこと、若い時の無分別と二十年これを悔しく思いぬ。

紋所を定めず、丸の内に三つ引き、また一寸八分の巴を付け、土用干しにも畳の上に直には置かず。麻袴に鬼綟（おにかとり）の肩衣、幾年か折り目正しく取り置かれける。町内で出ねばならぬ葬礼には、是非もなく鳥部山に送るものの、人より遅れて帰る途中に、六波羅の野道にて丁稚とともに、苦参（とうやく）（センブリ）を引き抜き、『これを陰干しにすれば、腹薬なるぞ』とただでは通らず。つまづく所では火打ち石を拾い袂に入れける」（『永』二―1）。

そうはいっても京都の商人は一般に豊かで、「目の前の桜鯛は、見たがる京の者に見せよと、毎夜魚の荷を京に上らせ」（『胸』三―4）、「山ばかりの京にては真魚鰹も食い」（同）ともある。

こうした京都の商人のあり方は、次のようにも記される。

「天下の町人なれば、京の人心、何ぞという時は大気なること、これ誠なり。これ常に胸算用して、随分と始末の良きゆえぞかし。過ぎし秋に京都において加賀の今春、勧進能をつかまつりけるに、四日の桟敷一軒を銀十枚ずつと定めしに、皆借り切りて空き所なく、しかも能より前に銀子渡しける」（『胸』三―1）。

恒例の四条河原の顔見せ芝居も、「顔見せ芝居の時分は、演じるのは同じ人であっても珍しく思え、心も浮き立ち、今日はあの座元（筆頭役者）、明日はこの太夫本（筆頭役者）、その次は『誰の座に大坂の若衆方がでる』と噂し、水茶屋を通じて桟敷を取らせ、楽屋から贔屓の役者に祝儀を与えて、『旦那おいで』といわれるまでの外聞を得ようと、無用の気を張る。提げ重箱の酒に取りのぼせて、我が家へは帰らず、鴨川の両岸の二階座敷に総踊りをし、甲高い声を出して叡山へも響くほどの騒ぎ」（『胸』三―1）である。

能や芝居の見物は気晴らしの一つではあるが、単にそれだけではない。「はした銀の商売人は、たとえ気伸ばしに芝居を見るとも、隣にタバコ吸わぬ所を見つけ、円座を借りて見たとしても、役者・若衆の名は覚えられるものを」（同）とあり、芝居の役者や若衆の名を知ることは、商売にまつわる雑談に重要であり、それを知っていることで商売がうまくいったに違いない。ちなみに「タバコ吸わぬ所を見つけ」とは、タバコを吸う人が近くにいては、タバコをねだられるからという吝嗇からである。

都の色里の島原での遊びも、同じことである。まず島原の風景

から見ると、「都の遊び所の島原の入り口は、小唄に歌われた朱雀の細道という野辺なり。秋の田の稔る折節には、諸鳥を驚かすために案山子をこしらえ、古編み笠を着せ、竹杖をつかせて置くも、鳶も烏も編み笠の普段の茶屋の焼き印を見て、供なしの大尽かと思い、少しも驚かず笠の上に止まり、案山子を粋ごかしに合わせる」（『胸』二―4）。

前に見た吝嗇で二千貫蓄えた男の跡を受けた息子は、親父に似て吝嗇であった。この男が、たまたま島原で遊びはじめるとどうなるか。

『揚げ屋の町で上等の女郎を呼んでの遊びなど思いもよらず、下級の女郎用の出口の茶屋に問い寄り、藤屋彦右衛門という茶屋の二階に上がり、昼の間は揚げ代が九匁という女郎を呼んでもらい、呑みつけぬ酒を飲み、これを手習いのはじめ。情文（なさけぶみ）のやりとり、次第に上級の女郎に進み、最上級の太夫を残らず買い、都の太鼓持ちの四天王に育てられ、この道に賢くなり、『扇屋の恋風様』とあだ名で呼ばれ、はじめて島原を見てから四五年で、二千貫目は塵も灰もなくなり、火吹く力もなくなり、家名の古扇のみ残りて、『一度は栄え、一度は衰る』と身の程を謡うたいて、一日暮らしせし」（『永』一―2）となる。

その島原へは京の人ばかりではなく、摂津伊丹の酒作り商人の息子も通う。その息子は吉野太夫と約束して、六人交替に駕籠を担がせ、午前二時の開門に到着すると、その時の揚げ屋の様子は、『まずお行水よ、白粥よ、柚味噌・酒麩の跡から、牡蛎のお吸い物出して、鴨の杉板焼きの火鉢はすぐに座敷へ』と、台所に煙り立ち続き、亭主は座敷に置き炬燵をしかけ、女房は濃い茶をたてて『お気晴らしに』と出す。座を取りなす引舟女郎に髪を撫でつけさせ、太夫付きの童女の禿（かぶろ）に足の裏をさすらせ、吉野太夫には足の指を一本ずつ揉ませ、よその部屋から聞こえる投げ節をも肴に酒を飲みかける、こんな栄華は大名でもできぬこと。『願わくば、我が声を聞くと、京都中の太鼓持が霜の夜でも裸で駆けつけ、『旦那がご上京なさった』と嬉しがるほどに、たくさんの祝儀をやりたい。とかく欲しい物は金銀ぞかし。何の算用することもなく、遣い放題に遣い捨てることができれば、この遊興のおもしろさは限りなかろう。目前の極楽とはここのこと、寝る間は仏』などと、三つ重ねの布団に寝ころんで、吉野太夫に話していると」（『織』一―1）と記されている。

島原だけが京都の性的享楽の場所ではない。先ほどの芝居も役者買いの場所だし、「京都に上り、野郎遊びに打ち込み、または東山の茶屋女を喜ばせ」（『永』四―4）とある。

京での商売にも色々あり、「銀一貫目あるとき、山崎の親の跡を捨て、京に上り、大名貸しの銀親へ頼み、これを預け置き」（『織』二―1）との大名貸しもあるが、何といっても江戸の項でも触れたように、江戸まで出店を出すほどの呉服関係が多い。芝居での散財で噂されたいという例にも「誰様の呉服所」（『胸』三―1）とか、「都の呉服棚の奥様といわるるほどの人」（『胸』二―3）とかとある。

長崎まで出かけて生糸の買い付けをする京都の商人で、富裕になった者については次のように記されている。

「同じ頃より長崎に下り、同じ糸商売する京の人、大分の手前者となり、今は手代を下して、その身は都に安楽にして、しかも物見・花見・女郎狂いも相応にして、分限なる人は数知れず。『これは如何なることにて、かくなりけるぞ』と尋ねしに、『それは皆、商人心というものなり。子細は世間を見合わせ、来年は必ず騰がる物を考え、踏み込んで買い置きの思入れが合うことから、拍子良く金銀かさむことぞかし。この二つ物賭（のるかそるかの賭）せずしては、一生替わることなし』」（『胸』四―4）。

この話は同じく長崎に出向いて生糸商いをしても、少しも儲からぬ商人との対比の話でもある。儲けることのできぬ商人は、「長崎の買い物、京売りの算用して、少しの違いもなく、後先考えて確かなることにのみかかれば、算用の外の利を得ることなく、皆銀の利払いに廻さざるを得ず」ということになる。

京に運ばれた生糸は、西陣などで織られる。その風景は次のように記される。

公家に仕える局（つぼね）女中は、北野神社への代参の帰りに、「今織りの機織りの音する門へ乗物を止めて、軒下に休みぬ。この家からすり鉢の音が聞こえ、下女がきびきびとすり鉢を摺っており、年若の内儀が腰掛けながら美しい手で若菜を揃え、鏡餅の名残を雑煮に作り、夫をもてなす風情であった。主人は中の敷居を枕に、心地よさそうに手足を延ばして寝、『去年の大晦日の勘定はゆるりと済ませた、我が家の気楽さ。公家になれば被り物がうるさく、装束がむつかしい。大名も腰のものを差して、袴肩衣で嫌だ。町人ほど心安きものはなし。『君がため春の野に出で、若菜摘む』と昔の人は読み給うたが、『阿爺（とと）がため、カカに若菜を揃えさせ』というところで、杓子果報（食物の配分に恵まれる）の我が身』という」（『織』六―1）のを見かけた。

西陣のすべての織屋が、こんなにのんびりしているわけではない。「ある時、西陣の絹織屋へ俵米を売り初め、置き替え（保証金）の約束も、年々かさみて、算用は合いながら、その銀がふさがりて、手廻しなりがたく」（『永』五―2）という、保証金だけは払うものの、決済代金は掛けにしつづけるような織屋もあった。また年末に現物の米を納入し、春に代金を利息とともに受け取る方法で、京都の織物屋仲間に米を納入していた商人に、「諸職人内談して、『一石に十三匁の利銀を三ヶ月出せということは、いかにしてもむごい仕掛け、年はどのようにも越せるので、この米借りるな』と言い合わせ」（『胸』四―3）るような場合もあった。

長崎からの生糸以外には、奈良からの晒し木綿が京都の呉服屋に運ばれている。「商売の晒し布は、年中京都の呉服屋に掛け売りし、代銀は毎年大晦日に集め、京を大晦日の夜半から我先に仕舞い次第、松明を灯して、南都に入り込む晒しの銀、何千貫目という限りもなし」（『胸』四―2）とある。

他にも江州の麻布を、近江八幡の商人の出店の京都四条東洞院の店では、毎年千駝ずつ売り払う（『織』一―4）などという例も

ある。

呉服に関連する業種、たとえば染物屋なども多い。初めは小さな染物屋で、富貴を祈っても甲斐がなかったので、腹を立てて貧乏神を祭ったほどの世帯であった。喜んだ貧乏神は繁昌させてやると、「柳は緑、花は紅」と夢で教えた。『我、染物細工なるに、紅との夢のお告げは、まさしく紅染めのことなるべし。しかれどもこれは、小紅屋という人が、大分に仕込みして、世の自由を足しぬ。それのみか、近年は砂糖染めの薄紅までも、しだしている。深い知恵者の多い京なれば、大方のことにては利を得られず』と、明け暮れ工夫をしだし」、新しい染め方の紅を発明して、それより裕福となったとある（『永』四―1）。

昔からの紅染めは、紅花を使うもので、紅花は近世では奥羽が特産である。砂糖染めは黒砂糖を使用するものかといわれ、黒砂糖は琉球の特産である。これらの京都への流入は、作品には直接でてこないが、京都へ送って染料にするという理由で茶殻を集めるという話はある。これは敦賀の利助という男で、「道ならぬ悪心起こりて、越中・越後に若い者を遣わして、茶の出涸らしを買い集め、京の染め物にいると申して、呑み茶に混ぜて、人知れず商売しければ、一度は利を得て家は繁昌しけるが、天これを咎め給うにや、利助、俄に乱人となる」（『永』四―4）とある。

京都に商人や職人が多ければ、それに使われる手代・丁稚や弟子たちも多い。西鶴が彼らの世界を描くことはそう多くはないが、次の話は少し珍しい例である。

「今の都の室町通り〔金融と商業の中心地で富裕な家が多い〕に軒を並べた家名の主、世渡りに疎きはなし。この所の手代・若き者まで、中京に住み慣れて、世間の沙汰も早く聞きつけ、人の善悪を見および、誰指南するとはなしに、自然と万の道を覚えぬ。これを思うに、人柄も住所によるなり。

同じ京でも、姉が小路の針屋の弟子となる身は、舞い錐のせわしく、耳穴〔針の穴〕の明け暮れ、分切りの仕事〔針金を針の長さに切る仕事〕に年中暇なく、御室の桜・通天の紅葉、春秋も知らず、七日の祇園の山鉾の有様を遂に見たこともなく、素麺・揉み瓜・なますを、祭の有り難き物と楽しむ外なし。

同じ年頃の若い者でも、良い所に主取りすると、今日は十四日の祇園、女郎の紋日とて揚屋を決め置いて呼び、また茶屋に一日遊びを約束し、あるいは風呂屋〔の湯女〕・素人（はくじん・私娼）を忍び連れ、一畳一歩の借り桟敷して、〔祇園祭の〕山の渡るを見せける。未だ年季奉公中の小者あがり〔の手代〕が、どこで黄金の釜を掘り出したのか、大分に使うことにぞありける。

同じ奉公をしているのに、紙入れに金銀絶やさず、『とても二百目や三百目、私商い〔自分の才覚での商売〕でもうけたとしても、我が代の時には足しにならず』と使い捨てる心と、針屋の弟子がお内儀の里へ五節句の祝儀を運んで、包銭の十文ずつを溜めて、『一匁八分も貯まったものだ。一生の願いに幅の狭い麻製の赤い褌一筋がほしい』と思うだけの心と、別世界の人ほどの差がある」（『織』六―4）との比較がある。

これら雇われ人ばかりではなく、このような男もいる。

「万屋甚平とて、出生の京の寺町三条にて育ちければ、腹の内より都の水を呑み、諸人の賢きことを聞きなれ、身過（みすぎ）は何にしても、五人・三人は世を渡るべきことなるに、ようやく女夫（めおと）の口を過ぎかねしは、口惜きことぞかし。

しかもこの男は、帳の上書きするほどの達筆、計算は難しい割り算にも達者、銀貨の目利きもでき、長口上も鮮やかで、料理も心得、謡もうまく、碁や将棋も上手で、随分と人の役に立っていた。ところが京では商売がうまくいかず、春は慰み本、夏は扇子、秋は踊り道具、冬は紙子〔紙製の衣服〕など、その時々の物を仕入れて、この二十年ばかり江州に通い商いをし、一年の内で女房の顔を見るのは二十日あまり。商いのご機嫌とりに昼夜遊び者となり、つまるところは夫婦の口過ぎ程度の稼ぎにすぎない」（『織』一―4）。

また、こんな夫婦者もいる。

「下京七条通りに小家を借り、春夏は女房に扇子を折らせ、秋の末より冬中は、男、手もみの紙子をこしらえて商いしけるに、六条参りの道者〔本願寺詣での団体客〕、国の土産に買う。少しは栄えて元手をしだす」（『織』四―1）。また「粟田口明神の宮のほとりの笹葺きの庵に、六十余歳の子のない夫婦。女房は本来は男仕事の馬の沓を作り、大津への馬方に売り渡世のたよりとした。男は毎日京に行き、量り売りで塩を売り、ようよう暮らしていた。家に帰れば、栗栖野の萩を柴とし、山科の里芋に観修寺の煎じ茶、これを楽しみとし、世にある人の栄華をうらやむことなし。ただ年中を夢のごとく過ごして、正月に餅もつかず、盆に鯖も食わず、栗・菊酒の用意もせず、取り集める掛け金もなく、人に済ませる借銭もない。さても軽き身体にて、外から見ては苦しみ、内證は楽介であった」（『織』二―4）。

中には跳ねっ返りの若者もいる。

「与次兵衛〔荒木与次兵衛。立役、武道事の名人〕の顔見せの初日に、左方の二軒目の桟敷に、勘当切られてもかまわぬ顔の若者、五六人も風を作って、芸子〔舞台子〕に色目を使わせ、下の見物衆にうらやましがらせる。この若者たちの噂を聞くと、川西〔職人・小商人の多い場所〕のやつらなり。

『中京の衆〔富家が多い〕と同じような大きな顔がおかしい。黒羽織の男は、米屋に入り聟して、十四五も年の違う老い女房。母親には二升入りの碓踏ませ、弟には空豆を売りに歩かせ、白柄の脇差しとは、やめてほしい。

その次の玉虫色の羽織は膠屋で、どこの牛の骨かわからないのに騙すような衣装。家は質に入れて、借銀に告訴され、東隣に無理を言いかけての境目論争も済まないのに、遊びに出るとは狂気の沙汰。

三番目の銀煤竹の羽織着た男は、利息付きの銀を五貫目借りて、それを敷銀に家具塗師の家に養子に行き、後家親を馬鹿にして、養父が死んで三十五日もたたぬに芝居見るとは、作法にはずれた男め。米や薪は当座買いの身上して、色を売る色子ども〔色を売

る歌舞伎若衆〕を酒の相手。かわいや神ならぬ身の色子どもの浅ましさ、銀になる客と思うべし。どうしてどうして、この四五年は買い掛けを済ませたことなし。

あのうちで染め嶋の羽織着た男、小さな銭店を出しており、兄には三井寺の出家がいるが、この年越しをできるかどうか。その他、一人も京の正月する者はあらじ』と指さして笑う」。

この若者たちは、「その後、毎日の河原通いに、同じ着物に色も変わらぬ羽織で、色茶屋へ通い、費用のことをいっても勘定も払わず、程なく大晦日となり、一人は夜逃げは古いと昼逃げし、行方知れず。また一人は狂人扱いで座敷牢。また一人は自害し損ねて、穿鑿の途中」という始末となる（『胸』三―1）。

雇い主の女房に、伊勢への抜け参りをさせ、二人で示し合わせて遊ぶ男もいる。抜け参りの付き添いにと雇われた、三十六七の女が二人をののしり、「あの罰当たりどもめ。大事の神参りに、宿々で夜の明けるまで二人で話し合い、小俣という所からは駕籠かきに代参させて、自分ら二人は参らぬ談合。亭主のある女房を抜け参りを勧め、親方に聞こえたら追い出さるるは知れたこと。うかつに雇われて、足が痛いのに三人乗りの馬にも乗せてくれずに、先に行きおって」という（『織』四―3）。

京の商人が落ちぶれて江戸で稼ごうと出かける話は、江戸の項で触れた。前に西陣の織屋の風景をうらやましく見ていた局女中の話を見たが、その局女中は町人の女房にあこがれるものの、結婚しても米が飯に変わるのをおかしがり、油でも火がともるのを不思議がり、何一つ町人世界のことを知らないので、何度結婚しても追い出される。その次第に没落する様子が、記されている。

「（美形なので）四条通りの白粉屋に置き看板に雇われても、商い口のきき方を知らないので追い出され、さまざまの恥を重ねて、恥知らずとなり、東川原の太鼓持ちを男とし、はじめのうちこそ下女を一人使っていたが、次第に貧乏になり、人の手から貰うことばかり心当てにしてきたので、年中買い掛かりを精算しないために、この男は五節句を家で過ごせたこともなかった。

今は鶯の局〔局女中の名前〕も姿が変わり、浅黄色の古袷の右の片袖は紙子で縫い継ぎ、霜月の風をしのぎ、観世紙縒りの帯して、髪はならず髷にさえ結わないで、二十日も湯浴みしないので毛虫のようになって、爪も切らず鉄漿（かね）もつけず、声つきも舌早にうら枯れ、かくも卑しくなるものかな。これにつれて、心ざしも恐ろしくさもしくなり、夜道を歩くこともいとわず、知らぬ男がさわれば、渡世の種にねだる気になり、借銭請いの言葉質を取り、まんまと女虎落（おんなもがり）〔女のごろつき〕と呼ばれた。

賃仕事に、さし足袋・元結い用の紙縒り（こより）、あるいは手間縫いのタバコ入れ、又は組み紐・線香の上包み、何にても受け取りて返すことなく売り食いし、八、九年も世をわたりぬ。『そこの女に物頼むな』といわれても、都の広さは、この邪（よこしま）でも年を暮らしぬ」と、鬼気迫る様相になる（『織』六―1）。

この他、東寺あたりの里人が初茄子を売りに来ている（『永』

二―1）など農民の姿もある。また差別された人びともいたが、封建時代の観念から西鶴はそれにわずかに触れてはいるものの、そこに踏み込んで人間を描くことはなかった。さまざまな人びとが、さまざまに暮らす京都は、「惣じて類をもって集まり、商売店も、二条通りに鮫・木薬・書物屋ありと、諸国の人も見及び、烏丸に烏帽子折りは年を経たることにて、伊勢神楽の勧進祢宜・鹿嶋明神の言触れ、頭に烏帽子かづくほどの者は知らぬということなく、歩き万歳・舞い舞いまでも、入り用のときにはここに行きて」（『織』四―1）というようにも描かれている。

京都は「花の都」（『胸』四―1）であり、「都の栄華」（『永』六―4）と人びとのあこがれの場所であった。その繁栄は公家・寺社・西国大名の京屋敷という消費人口を抱えていたこともあろうが、最大の理由は洗練された感覚に基づく呉服の生産と、その関連業種の集積にあったといえよう。それらは前代まで政治の中心に位置した、という事情がもたらした富の集積を背景としたのである。

## 三　奈良の町、伏見の町、大津の町

〈奈良の町〉

京都の項にも述べたように、奈良の町人には特産品の晒し布の商人が多い。京都から「南都に入り込む晒しの銀、何千貫目という限りもなし」（『胸』四―2）であった。奈良の大晦日、元日の様子は次のように描かれている。

「奈良の大晦日の夜は、大坂・京より格別に静かで、掛け乞いの者もあるだけで済まし、『この節季にはならぬ』というと、そのままで帰り、再度来ることはない。差引勘定は奈良では四ツ〔午後十時〕には終い、正月気分になって、家々に庭囲炉裏（にわいろり）とて、釜を掛けて焚き火して、庭に敷物して、家内の旦那も下人も一つになって楽居して、普段の居間は明けておき、竹の輪に入れて形を整えた丸餅を焼いて食べるのも、卑しからず福相である。

さてまた、都の外の宿の男の者ども〔賤民〕、大乗院御門跡の家来の因幡という人の許で、例にまかせて祝い始め、『富々、富々』と町中を駆けめぐれば、家毎に餅に銭添えて取らせける。大坂などの厄払いに同じ。夜も明け方の元日に『俵迎え、俵迎え』と売るのは、板に押した大黒殿なり。二日の曙に『恵比須迎え』と売る。三日の明け方に『毘沙門迎え』と売る。毎朝三が日は福の神を売るぞかし。

さて元日の礼儀、世間のことはさておき、まず春日大明神に参詣するに、一家一門末々までの親類を引き連れ、ざざめきたる。このとき、一門の広きほど外聞に見えける。何国にても、富貴人こそうらやましけれ」（『胸』四―2）。

まさに奈良の富貴人はゆったりと過ごしているのであるが、京都の観世太夫の勧進能の桟敷を「奈良・大津・伏見も、人は替わらねど、この桟敷、一軒も取らず」とあり、経済文化力では京・

大坂・堺には及ばなかった。

また伊勢参宮にも、「あれは奈良からの参り、皆、お歴々〔富裕なお歴々〕に見えて、それはそれは始末なる参りなり。何ほど口で銭乞うても、あの仲間からは一文以上はもらえぬ」（『織』四―3）と、銭乞いの比丘尼にも評判されている。

しかし、堺から松原を通って奈良へ、二十四五年も鮹だけを売りに通う魚屋の話がある。鮹の足を一本切り取って七本にして売り、さらに六本にして売って、その一、二本の足を途中の松原の煮売り屋に売った。足の一、二本の不足に気づいた奈良の町人はなく、それに気づいたのは碁をうっている暇な隠居だけだった、とある（『胸』四―2）。これも京・大坂などに比べれば、奈良は世知辛くないということであろう。

同じ話の末尾には、奈良の浪人者が流入する京からの晒し布の代金を強奪しようとして果たせず、生駒越えの暗峠（くらがりとうげ）で大坂帰りの人の荷物を強奪してみると、その荷物は数の子であったという話が付されている。

ともあれ奈良の町人は、奈良晒しという地場産業にかかわり、その集散によって富を得るのが基本であった。

〈伏見の町〉

「昔に伏見を徳川家康が居城としていたころ〔慶長の初年、約九十五年前〕、諸大名の御成門が軒を並べて輝き、金銀珠玉をちりばめ、珊瑚細工の紅梅・五色の浮き雲も見事に、龍はさながら動くかと見え、虎はそのまま駆けるかの勢い、越前殿〔結城秀康〕の御門には、まだ見ぬ唐土の二十四孝の美形を彫り物に、その清らかなることは言葉に述べがたし」といわれた伏見も、「その時の繁昌に変わり、屋形の跡は芋畑となり、見るに寂しき桃林に、花咲く春には人も住むかと思われける。常は昼にも蝙蝠も飛んで、蛍さえ出ずべき風情なり。京街道は昔残りて、店の付きたる家もあり。片脇は崩れ次第に、人の気も絶えて、一町に三所ばかり、かすかなる朝夕の煙、蚊帳なしの夏の夜、布団持たずの冬をようように送りぬ。葛籠（つづら）・吹き矢の細工人は、まだしもお歴々〔富裕者〕なり。削ぎ板屋根の重し石用の竹の輪作り、扇の要を刻み、灸の箸作り、荷縄をない、売ったところで、細き命はつながれまじく、うき世に住むに哀れなる者多し」という落ちぶれようであった（『永』三―3）。

また、「都につづく伏見の里、通り筋の外の今の淋しさ、ことさらに秋は物哀れに、垣根に咲きたる朝顔の茶の湯の沙汰も絶えて、手釣瓶の縄をたぐり捨てかけたり。萩は見る人もなき昼の錦、玉芙蓉の枝に泣く子の襁褓（むつき）〔おむつ〕など干しける。昔の春は日暮らしの御門と眺めし所も、間引き菜の畑となり、両替町といいし所も、今は銭が百ありそうなる家なく、三文の油、一文ずつの塩売り、赤鰯さえ年越しに見えるばかり。京へ一里の道なれば、女の足にても夕食過ぎより行き帰る所を、貧にからまれたれば、大方の妻子は大仏〔東山方広寺の大仏〕の顔を見ぬ人ばかりなり」（『織』五―3）ともある。

貧窮目を覆うばかりという伏見であり、伏見を舞台にした話は

二つともに、貧しい人びとを対象とする零細な質屋の話である。しかし、出羽酒田の米問屋に諸国の商人が集まった部分に、「十人よれば十国の客、難波津の人あれば、播州網干の人もあり。山背の伏見衆、京・大津・仙台・江戸の人、入り混じりての世間話」（『永』二―5）、京の観世の勧進能の桟敷についての「奈良・大津・伏見も、人は替わらねど、この桟敷、一軒も取らず」（『永』四―5）とあり、富裕な商人もいたはずである。

西鶴の描く伏見は、「東に城跡の山深く、初茸狩りせし人も、皆遊興にはあらず、二条の八百屋より初茸をたずねさせける。万の虫を取って売るなど、身過ぎは草の種ぞかし。この数千軒、何をして世を渡るとも見えざりしに、朝夕の煙立ちけるは、せめても大川〔淀川〕の船着き場にて、艫（とも）から舳先（へさき）ほどの細き身代の楫を取って、手ぐらまぐらに〔当座しのぎに〕年波を渡りける」（『織』五―4）と貧しく、京から大坂への交通路の船着き場を重視しているにすぎない。京からは陸路で伏見へ、そこで船に乗り換えて大坂へというのが、基本的な交通路であり、西鶴にとっては単なる交通路上の通過点にすぎなかった。

〈大津の町〉

「この所〔大津〕は北国の船着き場にして、ことさら東海道の繁昌、馬次（うまつぎ）〔馬継ぎ〕・替え駕籠、車を轟かし、人足の働き。蛇の鮨・鬼の角細工、何をしても売れないことはない。近年、問屋町長者の如く、屋造り昔に変わり、二階に撥音やさしく、芝屋町より白女（しゃれおんな）呼び寄せ、客の遊興、昼夜の限りもなく、天秤の響きわたり、金銀もある所には瓦石のごとし」（『永』二―2）とあるように、大津は交通の要衝であった。

伏見の項に引用したが、出羽酒田の米問屋に集まる諸国の商人の中にも「京・大津・仙台・江戸の人」とあった。この米商人と、池の川という針屋くらいが、具体的な職種のわかる例である。針屋は娘を京へやる縁談に、銀二千枚〔銀八六貫目・小判千四百三十三両〕を持参金とし、醤油の量り売りの男に、「人の内證は知れぬもの、この大津にもさまざまあり」とうらやましがられている（『永』二―2）。

この『永』二―2は、大津の醤油売りの男が、大津の町を歩きまわっての見聞が軸となっている。関寺には森山玄好という医者がおり、薬もよく知り、見立ても上手だったが、誰も呼んでくれなかったために貧乏で、碁会所をして一番に三銭ずつの茶代を取り、それでようやく生活していた。

馬屋町には坂本仁兵衛という大商人がいたが、次第に貧乏になり、家と蔵を売って残った二十八貫目を元手に、商売を三十四五度も変えたが、その元手もなくしてしまった。「一つも埒の明かぬ男。貧乏神の社人になれ」と、一門からも見限られた。

松本町には後家がおり、一人娘に黄唐茶色〔黄褐色〕の振り袖に菅笠を着せて、言葉を少し訛らせて「抜け参りにご合力」と、お伊勢さまを売り物にして、ここ十二三年も同じ嘘で世渡りをしていた。

また、伊勢参りの話では、銭乞いの比丘尼に、無理に歌を歌わ

せ、付近の名所まで話させて、その上で銭もやらず、「比丘尼も、我らが顔をよく見知っておいて、石山寺へ参ったら寄りや」といい捨てて、逃げていく成人前の飛び上がりの若者四人の話がある。それは大津の浜辺の者どもであった（『織』四―3）。

他には、「昔、大津にて千貫目の借銭を負いければ、世になきことと申せしに、近年、京・大坂に三千貫・二千五百貫目の分散〔倒産〕、いずれも遠国の小さき所にはないことぞかし。ならびなき大湊なればこそ、貸す人もあり、借るもこれほどまでは商人中の商人なり」（『永』三―4）とか、「昔、大津に千貫目の差し引き〔借金〕を、世界になきことと噂せしに、近年、京・大坂に三千五百貫目・四千貫目の分散も、さのみ大分という人なく、その時代にて、物事手広くなりぬ」（『永』六―4）とかとある。どんな商売での借金かはわからないが、大津がこのような例にあげられるのは、それなりの発展をしていたからである。その発展はすでに見たように、交通の要衝にあたることにあり、京都の東方と北方の出口としての地理的重要性にあったといえよう。

## まとめにかえて

元禄期、十七世紀後半から十八世紀の江戸、京都などの様相を西鶴の町人三部作から再構成しただけなので、まとめる必要はなかろう。再構成してみての筆者の感想をいくつか述べておきたい。

西鶴作品には武家物というジャンルが別にあるが、それにしても江戸以外の都市ではほとんど武士が登場しない。西鶴が身を置いた場所が大坂であり、大坂には短期で交代する大坂城代しか、武士勢力が存在しなかった理由もあろう。加えておそらくはまだ武士階級は安定しており、大名貸しは多く行なわれたことが記されるものの、それは安定した金儲けという側面で描かれることが多いので、それほど武士と商人の間に対立がなかったことによるのかもしれない。

また、京都の項でみたように、西鶴は手工業者が嫌いで、商人が大好きのようである。これは当時の手工業者が徒弟制の枠内で、新しい工夫などをする余地が少なく、「才覚」を働かせる部分がなかったことによるものであろう。

紙幅の都合で省略してしまったが、京都の庶民を描いた家主の女房と借家人の女房の喧嘩の話など、今でもありそうな話がある。士・農・工・商・穢多非人という身分制社会の枠組みとそれに立脚する政治、自然経済を根底とする封建経済、こうした社会の枠組みが、どのように庶民の意識に投影されているか。それが把握できないようなら、自分の歴史学的感性を疑うべきだ、といわれたことがある。

西鶴が手工業者を嫌うのは、士・農・工・商という身分制の中で、身分的低位置に置かれた商人西鶴が、直上身分の手工業者に対していわれなき嫌悪感を抱いているためだ、などと無理に報告したことを思い出す。身分制的な重圧など西鶴は感じていなかったと、当時内心では思っていたのに。今また西鶴を読んで改めて、

社会と意識の対応の問題を感じる。

なお、本稿は学内共同研究「大阪の歴史的役割の研究—近代化の前提とその特質の究明—」（宇田正代表）の報告の一部である。あわせて同研究班から出版される刊行物（題名未定）も参照されたい。